

(様式 1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成29年度委託事業完了報告書【実践地域】

番号	05	機関名	国立大学法人秋田大学
----	----	-----	------------

実践地域名	拠点校名	児童生徒数
国立大学法人秋田大学	秋田大学教育文化学部附属小学校	549

○ 実践研究の具体的内容

I 実践地域における取組の概要

(1) 本実践研究に関連する実践地域の現状・課題

思考を広げ、深める話し合い活動の在り方を改善していくことが全国的な課題の一つとなっている。こうした課題の解決に向け本学では、平成24年度から2期6年に渡る計画に沿って「対話」を通して思考を深める授業づくりに取り組んでいる附属小学校を本研究実践の拠点校として指定し、一年次の実践研究に取り組んだ。

一年次の実践研究の結果、拠点校の学力の面では、「全国学力・学習状況調査」「秋田県学習状況調査」で課題となっている設問の正答率・通過率で、全国平均及び県平均を上回る向上が見られた。特に、自分の考えを書く力を問う問題の正答率・通過率が高いことから、「対話」を通して思考を表現する力が培われていると考えられる。

一年次の実践研究を通して見えてきた課題は、次の二点である。一つ目は、拠点校が示した**①教科等の本質に迫るために必要な「見方・考え方」と学習内容の焦点化**、**②理解や表現の質を高めていく過程に即した学習活動の構成と支援の工夫**という課題に向けた理論面での支援である。二つ目の課題は、県内教員に向けた実践事例と研究成果の発信である。授業実践と研究成果を発信し、さらなる普及を図るために実践事例集の作成や配布、研究会等の周知等の面で拠点校と連携を図り、広報活動を支援する必要がある。

(2) 研究課題

「教科する」授業を通して新たな価値を創造する力を育むアクティブ・ラーニング

本県及び本学の現状と課題を踏まえ、引き続き「対話」を通して「新たな価値を創造する力」を育成すべき資質・能力の核として位置付け、その育成を図ることを具体的な重点として設定し、実践研究に取り組んだ。秋田県と本学教育文化学部附属小学校に共通する対話的な学びの質の向上という課題を解決するためにも、本実践研究は、教科等の本質に迫る学びの中で知をつくり上げる経験を積み重ねていくことで、「対話」を通して「新たな価値を創造する力」という共通の資質・能力を高める実践事例を示すことを目的とする。

(3) 実践地域としての具体的な取組内容

1. 本学では、拠点校である附属小学校が示した課題解決に向け、理論面での支援を行った。
2. 拠点校で行われる公開研究会及び授業研究会等について、拠点校と連携を図り広報活動の支援を行った。
3. 実践協議会を6月、1月に実施し、研究の方向性についての指導や助言、成果や課題の検討を行った。
4. 教職大学院と連携し、今後の授業づくりに資するよう本研究の成果と課題を大学院生に広く発信した。
5. 教育文化学部の教育実習や、教職大学院インターンシップにおいては、本研究の成果を踏まえアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善について拠点校の教員が学生・院生に助言や指導を行った。

II 拠点校における本事業への取組状況

(1) 本実践研究に関連する学校の現状・課題

昨年度は、自らの考えを広げ、深める対話的な学びの在り方を実証的に示すため、各教科等の授業に「課題解決に向け、一人一人が主体的に思考し表現する活動と、仲間と共に協働的に思考し表現する活動を往還させながら、学びの質を高めていく学習活動」を位置付けることで、「対話」を通して新たな価値を創造する力という資質・能力を育むことを目指し実践研究に取り組んだ。

その結果、教科の特性に応じた「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」を通して教科特有の資質・能力を高める学習・指導方法について、以下のような成果が得られた。

国語科 子ども自身が設定した「主たる学習問題」をもとに学習を進めることにより、何度も叙述に立ち返って考える主体的な学びの姿が見られた。

社会科 見いだした社会的事象を、比較・分類・総合することで、様々な視点から「社会的事象や人々の相互関係」について考える姿が見られた。

算数科 操作活動や図と式とを結びつけた「対話」によって、子どもたちの数学的な概念が豊かになっていく姿が見られた。

理科 生活との関連を図った単元構成により問題を自分ごととしてとらえ、主体的に観察、実験に取り組み、知識を活用して考える子どもの姿が見られた。

教育課程全体で育成すべき資質・能力である「対話」を通して「新たな価値を創造する力」を育むために、各教科等共通に重視すべき学習過程や指導方法について探究した結果、有効な学習過程・指導・思考の表現の在り方が見いだされた。

昨年度の課題は以下の二点である。

- 1) **教科等の本質に迫るために必要な「見方・考え方」と学習内容の焦点化**
- 2) **理解や表現の質を高めていく過程に即した学習活動の構成と支援の工夫**

(2) 拠点校としての具体的な取組内容

今年度は昨年度の成果と課題を踏まえ、以下の重点を設定しさらなる授業改善に取り組んだ。

- 1) 教科等の本質に迫る「見方・考え方」と学習内容を焦点化した授業づくり
- 2) 一人一人が理解や表現の質を高めていく学習活動の展開と教師の支援の工夫

(3) 教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に関する校内研修に係る取組内容

今年度の重点を踏まえ、教科等の本質に迫るために必要な「見方・考え方」と学習内容の焦点化がなされているか、「対話」を通して理解や表現の質を高めていく過程に即した学習活動の構成と支援となっているか、という視点から学習指導案や授業の検討、教材分析を重ね、学習・指導方法の改善に取り組んだ。授業づくりのプロセスを教科等部や研究委員、本学の研究協力教員を中心としたチームで実施すること、事前授業や提案授業に関する省察を通して自己の課題や変容を意識化することを年間継続的に行い、授業改善へとつなげた。授業検討会では、本学の研究協力教員や外部講師からの指導を踏まえ、より広く専門的な見地から成果と課題をとらえることができるように努めた。

各教科等の授業に「見方・考え方」を働かせる必要のある学習活動を位置付けることにより、対話的な学びの過程がより教科等の本質に迫るものとなるよう改善を図った。

実践に当たっては、学習指導案に「仲間との対話」の場面における、教師の手立てと新たな価値を創造した子どもの姿、学びを深める「見方・考え方」を明記することで、ねらいの焦点化と学習過程及び指導方法の具体化を図った。

実践後の事後研究では、各グループの「対話」記録や観察された事実をもとに、目指す子どもの姿と実際の子どもの姿を比較し、単元や授業を通した変容や各種調査結果を総合的に分析した。

(4) 実践研究の具体的な内容

各教科等の授業に「見方・考え方」を働かせる必要のある学習活動を位置付けることにより、対話的な学びの過程がより教科等の本質に迫るものとなるよう改善を図った。

実践に当たっては、学習指導案に「仲間との対話」の場面における、教師の手立てと新たな価値を創造した子どもの姿、学びを深める「見方・考え方」を明記することで、ねらいの焦点化と学習過程及び指導方法の具体化を図った。

実践後の事後研究では、各グループの「対話」記録や観察された事実をもとに、目指す子どもの姿と実際の子どもの姿を比較し、単元や授業を通した変容や各種調査結果を総合的に分析した。

○ 実践研究の成果とその分析

今年度の実践研究の結果、本実践研究の目的である次の2点について以下のような知見が得られた。

(1) 国語・社会・算数・理科の4教科に重点を置き、それぞれの教科の特性に応じた「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」を通して教科特有の資質・能力を高める学習・指導方法の在り方を示す

<国語科>

- 1) 言葉を豊かにとらえ、言葉に対する認識を更新するために、「対話」が有効に機能する場面が見えたこと。
- 2) 言葉に着目した「対話」にするために、有効な手立てが見えたこと。
- 3) 単元で身に付けさせたい資質・能力と、そのために単元を通して働かせる「見方・考え方」を明確にして単元を構想し、指導したことにより、学びをつなげ、活用する子どもの姿が見られるようになったこと。

<社会科>

- 1) 社会的な「見方・考え方」を広げるための手立てとして、複数の視点から社会的事象の意味について考察する学習過程の工夫を図ったこと。
- 2) 社会的事象を比較し、類似点や相違点を見い出すために資料提示の工夫を図ったこと。

- 3) 子どもの主体的な学びを促す課題設定を行い、社会科で「対話」が有効に働く場面が見えてきたこと。

<算数科>

- 1) 算数科における「対話」の有効な場面を見いだすことができたこと。
- 2) 算数科における主体的な学習を促す導入部分の手立てが見えてきたこと。
- 3) 納得しながら新しい知識や数学的な考え方を獲得するための手立てが見えてきたこと。

<理科>

- 1) 単元で身に付けさせるべき科学概念と、用いる「見方・考え方」を明確にした上で、単元間や学年間の系統性を教師が意識し、さらに実生活とつなげる段階を踏んで指導することにより科学概念の強化を図ることができたこと。
- 2) 実生活とつなげるための教材開発を行い、単元構成を工夫したこと。
- 3) 科学的な問題解決学習の過程で「対話」が有効に機能する段階が見えてきたこと。

(2) 教育課程全体で育成すべき資質・能力である「対話」を通して「新たな価値を創造する力」を育むために、各教科等共通に重視すべき学習過程や指導方法を整理し、その在り方を示す。

1) 学びを深めるために必要な「見方・考え方」を焦点化した指導

各教科等をよりよく学ぶために必要な「見方・考え方」を整理し、単元・題材および本時で用いるものを焦点化して授業づくりを進めたことによって、「対話」を通して新たな価値をつくり出す学習過程が教科等の特質に即したものへと改善が図られた。

2) 「対話」のもつ学習効果を促す支援

理解や表現に質的な高まりが見られた実践を分析、整理した結果、「対話」のもつⅰ.モデリング、ⅱ) 葛藤、ⅲ)精緻化、ⅳ)省察といった学習効果を活かした学習活動と、それを促す教師の支援が特に有効であることが明らかになった。

○ 実践研究の成果とその分析

本実践研究を通して、「対話」を通して新たな価値を創造していく学習活動を積み重ねてきたことで、拠点校の子どもの意識の面では協働的な学びに対する認識に向上の変容が見られた。また、学力の面では、事象の意味や意図を理解したり、理解したことを自分の言葉で表現したりする力の高まりが見られた。

子どもの意識の面では、「対話」を通して思考を広げたり深めたりすることができていると答えている割合が84.1%から95.5%と11.4%上昇しており、ほとんどの子どもが「対話」を通した思考の効果を実感しているといえる。

本研究取り組み後(H28・H29)、全国学力・学習状況調査において2年連続で国語・算数ともにA・Bすべての問題で全国平均を上回っており、特に活用力を問う問題の正答率が高い。また、「全国学力・学習状況調査報告書」において課題とされている設問の正答率では、平均して国語で19.3ポイント、算数で17.8ポイント全国平均を上回っている。全国平均との差も、向上の変容が見られ、知識の定着、学んだことの活用という両面で向上が見られたことから、「対話」を通して思考を表現する活動を通して一人一人の理解や表現の質が高まってきていると考えられる。

こうした結果から、「見方・考え方」を働かせた学習活動を積み重ねることは、「対話」を通して「新たな価値を創造する力」を育む上で有効であると考えられる。

教員の意識の面では、必要感がある課題設定、深い学びに結びつけていくための教師の「対話」のコーディネ

ネット力、既習内容と関連付けたり考えを再構成したりするための支援の重要性に気付き、主体的・対話的で深い学びの視点から自己の授業を改善しようとする意識の高まりが見られた。

保護者アンケートでは「子どもたちの体験を重視したり、自分でよく考えたりするように授業を工夫している」と考えている保護者は94.7%であった。本項目は昨年度も9割を超えており、対話的な学びを軸とした授業改善の取組に対する理解が得られていると考えられる。

授業づくりの面においては、学習指導案検討だけでなく、事前授業や模擬授業をチームで実施することで学習活動そのものについての分析を多面的に進めること、子どもの姿をもとにした学習活動分析をていねいに行うことの有効性を明らかにすることができた。

また、「対話」の場面に焦点化した学習指導案を作成し、予想される子どもの反応と実際の姿を比較検討しながら修正を繰り返すことで、より子どもたちの学習過程に即した有効な教師の支援を具体化していくことができた。こうした取組により、秋田県で重視されている探究型授業の課題となっていた対話的な学びの質を高める授業研究のモデルケースを示すことができた。

本研究を通して「各教科等共通に重視すべき学習過程や指導方法」を探究していく中で、次の4点の知見が得られた。

- ・ 教科の本質に迫る「対話」を通して資質・能力を高めるためには、「見方・考え方」を働かせた学習活動を通して、教科特有の対象を捉える視点や思考の進め方を繰り返し用いて探求する経験を積み重ね共有していくことが重要であること。
- ・ 主体的に課題を探究していく過程で生じる、「困った」「できない」「もっとよくしたい」といった思いから子どもたちが「対話」する必然性を感じる場面を見極め、活動を設定することが重要であること。
- ・ 何のために「対話」するのか、目的を明確にした上で学習過程に「対話」を位置付けることが重要であること。
- ・ 「対話」を深い学びにつなげるためには、活動後の省察によって、「何を」「どのように学んだのか」自覚していくことが重要であること。

今後の課題は、「見方・考え方」を働かせた教科の本質に迫る学習活動を意図的に設定し、積み重ねることが、資質・能力を高めることにつながっていくという本研究を通して得られた知見をすべての授業に広げていくことである。子どもたちが自覚的にその教科ならではの「見方・考え方」を用い、教科や領域を超えて様々な学習や問題解決に駆使できるように、系統性や連続性を踏まえた指導を行うことが求められる。

○ 実践研究成果の活用方策

本研究を通して得られた成果を次の形で活用していく。

- (1) 拠点校の公開研究協議会等における提案授業を通して、公立学校教員への研究成果の発信を継続的に行う。
- (2) 教職大学院や学部と連携し、公開研究会や校内研修会等に向けた学習指導案検討会や提案授業の参観と、授業検討会への参加、及び拠点校の教員による講話の実施を通して、学部生・大学院生に広く発信し、今後の授業づくりに資するよう成果と課題を伝えていく。
- (3) ホームページや研究紀要等の発行を通して、研究成果を発信し、普及を図る。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成29年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	05	都道府県名	秋田県
----	----	-------	-----

拠点校名	秋田大学教育文化学部附属小学校
------	-----------------

○ 実践研究の具体的内容

自らの考えを広げ、深める対話的な学びの在り方を実証的に示すため、各教科等の授業に「課題解決に向け、一人一人が主体的に思考し表現する活動と、仲間と共に協働的に思考し表現する活動を往還させながら、学びの質を高めていく学習活動」を位置付けることで、「対話」を通して新たな価値を創造する力という資質・能力を育むことに取り組んだ。今年度は昨年度の成果と課題を踏まえ、以下の2点の重点を設定しさらなる授業改善に取り組んだ。

- ・ 教科等の本質に迫る「見方・考え方」と学習内容を焦点化した授業づくり
- ・ 一人一人が理解や表現の質を高めていく学習活動の展開と教師の支援の工夫

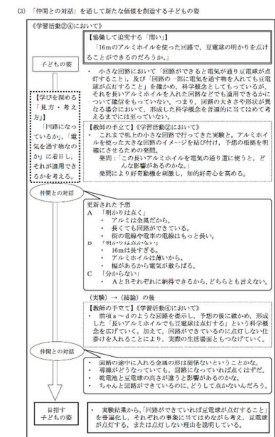
具体的には、各教科等の授業に「見方・考え方」を働かせる必要のある学習活動を位置付けることにより、対話的な学びの過程がより教科等の本質に迫るものとなるよう改善を図った。

実践に当たっては、学習指導案(右図参照)に「仲間との対話」の場面における、教師の手立てと新たな価値を創造した子どもの姿、学びを深める「見方・考え方」を明記することで、ねらいの焦点化と学習過程及び指導方法の具体化を図った。

実践後の事後研究では、各グループの「対話」記録や観察された事実をもとに、目指す子どもの姿と実際の子どもの姿を比較し、単元や授業を通じた変容や各種調査結果を総合的に分析した。その結果、本実践研究の目的である次の2点について以下のような知見が得られた。

(1) 国語・社会・算数・理科の4教科に重点を置き、それぞれの教科の特性に応じた「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」を通して教科特有の資質・能力を高める学習・指導方法の在り方を示す

各教科等部で重点を設定し、「対話」を通して教科特有の資質・能力を育む効果的な学習・



指導方法を明らかにすることに取り組んだ。以下にその実践から得られた成果と課題を示す。

国語科	重点	1)言葉との新たなつながりを学びとして積み重ねる場の充実 2)言葉と向き合う中で生まれた問いをもとに、友達と自分の思考を結びつけながら言葉を豊かにとらえる「対話」の充実
-----	----	---

- 成果** 1) 言葉を豊かにとらえ、言葉に対する認識を更新するために、「対話」が有効に機能する場面が見えたこと。
2) 言葉に着目した「対話」にするために、有効な手立てが見えたこと。
3) 単元に身に付けさせたい資質・能力と、そのために単元を通して働かせる「見方・考え方」を明確にして単元を構想し、指導したことにより、学びをつなげ、活用する子どもの姿が見られるようになったこと。

課題 文章構成を意識して読んだり、話したりする経験を積み重ねていくことが必要である。

社会科	重点	1)生活経験と学習内容が相互にかかわり合う学びの工夫 2)子どもの思考が、事実をもとにした考えの構築へとつながる指導の工夫
-----	----	--

- 成果** 1) 社会的な「見方・考え方」を広げるための手立てとして、複数の視点から社会的現象の意味について考察する学習過程の工夫を図ったこと。
2) 社会的現象を比較し類似点や相違点を見いだすために資料提示の工夫を図ったこと。
3) 子どもの主体的な学びを促す課題設定を行い、社会科で「対話」が有効に働く場面が見えてきたこと。

課題 事実をもとにした考えの構築につながるように、根拠を示しながら「対話」を重ねていく経験をさらに重ねていく必要がある。

算数科	重点	1)子どもが主体的に学び、数学的な考え方のよさを実感できるような活動の充実 2)事象を数理的にとらえ、筋道を立てて考えながら、「対話」を通して数学的な概念を豊かにしていく過程の充実
-----	----	---

- 成果** 1) 算数科における「対話」の有効な場面を見いだすことができたこと。
2) 算数科における主体的な学習を促す導入部分の手立てを見いだすことができたこと。
3) 納得しながら新しい知識や数学的な考え方を獲得するための手立てを見いだすことができたこと。

課題 単元の系統性を意識し、既習の中で課題解決のために有効に用いることのできる「見方・考え方」を教師が確実に把握し、子どもがそれに気づき、活用できるような支援の工夫が必要である。

理科	重点	1)理科の「見方・考え方」を生かしながら、科学的な概念を獲得していく場の工夫 2)実生活から問題を見いだしたり、学んだきまりを実生活に当てはめて考えたりする場の工夫
----	----	---

- 成果** 1) 単元に身に付けさせるべき科学概念と、用いる「見方・考え方」を明確にした上で、単元間や学年間の系統性を教師が意識し、さらに実生活とつなげる段階を踏んで指導することにより科学概念の強化を図ることができたこと。
2) 実生活とつなげるための教材開発を行い、単元構成を工夫したこと。
3) 科学的な問題解決学習の過程で「対話」が有効に機能する段階が見えてきたこと。

課題 「理科の授業で自分の考えを説明・発表している」という子どもが82.9%であった。昨年度より8.2%増えたことは、教師が「対話」が効果的に働く段階を模索しながら意識的に取り組んできた成果とも言えるが、言葉に限らず思考を表現し高め合っていく経験を積み重ねることにより、今後のさらなる向上を図りたい。

(2) 教育課程全体で育成すべき資質・能力である「対話」を通して「新たな価値を創造する力」を育むために、各教科等共通に重視すべき学習過程や指導方法を整理し、その在り方を示す

子ども一人一人が何を、どのように学ぶことができたかという点に着目し、各教科等の授業実践を分析した。各教科等の分析結果を総合し、共通する要素を抽出することで「対話」を通して新たな価値を創造していくために必要な学習過程や指導の在り方を見いだすことができた。

1) 学びを深めるために必要な「見方・考え方」を焦点化した指導

各教科等をよりよく学ぶために必要な「見方・考え方」を整理し、単元・題材および本時で用いるものを焦点化して授業づくりを進めたことにより、「対話」を通して新たな価値をつくり出す学習過程が教科等の特質に即したものと改善が図られたことは大きな成果であった。

今年度は、課題を探求し新たな価値を創造していく過程で、対象の「何に着目し、どのように考えを進めていくのか」という「見方・考え方」を各教科等部で整理することに取り組んだ。その結果、学びを深めるために必要な「見方・考え方」を繰り返し明示的に指導することが可能となり、新たな価値を創造していく思考・表現・省察といったプロセスがより教科等の本質に迫るものとなった。また、授業構想や学習指導案検討の段階から、「見方・考え方」を視点として学習内容や学習活動を吟味したことも学びの質を高める上で非常に有効であったと考える。

さらに、教科等ならではの「見方・考え方」を働かせる必要のある学習活動を位置付けたことにより、教科等の本質に迫るために必要な視点や思考方法を繰り返し用いて課題を探求していく子どもたちの姿が見られた。特に「仲間との対話」の場面では、着目する点や思考の進め方が共有されているため、それぞれの教科等のねらいとする新たな価値の創造につながる「対話」が数多くの実践で展開された。また、ふり返り等の記述でも学習過程で学んだ視点や考え方をういて、自分の考えを表現する姿が見られた。こうした子どもの姿の変容から、「見方・考え方」は、より多くの子どもが「対話」に建設的に参加すること、教科等の思考過程に即した形で思考を表現することを可能にする手段としても有効に機能することを見いだすことができた。

こうした複数の実践に共通する子どもたちの変容から、教科等特有の「見方・考え方」を働かせながら知を探求し、新たな価値をつくり上げていく学習経験を積み重ねることは、各教科の資質・能力を育み、本研究の目指す「対話」を通して新たな価値をつくり出していく力を高める上で有効であると考えられる。

以上のことから、「見方・考え方」の明示的な指導とそれをういた学習経験の積み重ねが、

「対話」を通して新たな価値を創造していく子どもの姿につながったものと考えられる。

2) 「対話」のもつ学習効果を促す支援

一方向に直線的に進んでいく知識伝達型の授業とは異なり、知識創造型の授業は、思考・表現・省察といった活動を往還しながら、漸進的に理解や表現の質が高まっていくという特徴がある。こうした特徴と「対話」の機能を踏まえ、理解や表現の質の高まりを促す効果的な学習活動の展開と教師の支援の仕方について探究を重ねた。

子どもたちの理解や表現の質的な高まりが見られた実践を分析、整理した結果、「対話」のもつ次のような学習効果を活かした学習活動と、それを促す教師の支援が特に有効であることが明らかになった。

i) モデリング

子どもたちが最も「対話」の必要性を感じるのは、課題の解決に向け、不安や困難を感じたり、多様な解決策を必要としたりする場面である。こうした場面では、他者の学習活動の様子や成果を「見る」ことによって、課題解決の方法やヒントを獲得したり、修正したりすることが有効である。体育でよりよい動きのモデルを動画で見たり、図工や外国語活動で表現の工夫を見つけたり、理科で生活経験と関連付けながら説明したりする場面で、仲間の取組を見合いモデル化していく「対話」が展開され、動きや表現の質を高めていく子どもの姿につながっていた。

ii) 葛藤

互いの考えを「聴く」ことによって、仲間の考えと自分の考えの違いやずれに気付き、新たな見地との出会いから生まれた葛藤を解消するために思考が活性化し、深い理解が促される。算数では二つの式を比較する場面、理科では異なる予想を検討する場面、道徳では自分と重ねながら判断を迷っている理由を考えるといった場面で、葛藤の機能を活かした「対話」が展開され、理解の質を深めていく子どもの姿が見られた。

iii) 精緻化

仲間に向かって自分の考えを「話す」ことで、自分の考えが再構成され、より精緻なものになっていく。新しい物事を自分自身の言葉に置き換え、既有知識と関連付けながら意味を与える精緻化は、深い学びを促す鍵となる「対話」の機能である。国語では構成の違いによる効果、社会では消防団の役割、算数では計算の過程や立式の根拠、家庭科ではうまみの違い、特活では目指すクラス像に近づくための具体的な取組、総合では相手の思いに寄り添ったかかわり合いの在り方といった核となる学習内容について何度も説明し直す中で、学んだことを自分の中で再構成し、理解をより確かなものにしていく子どもの姿が見られた。

iv) 省察

活動をふり振り返り学んだ内容や方法について考える省察は、理解や表現の質を高める上で非常に有効である。一生懸命学習に取り組んでいるときほど、自分が用いた方法や学習内容を自覚することは難しいものである。しかし、活動をふり返る場面に仲間との「対話」を位置付けることによって、学習過程をより広い視点から客観的にとらえることが可能となる。生活科では朝顔や野菜の世話の仕方について、体育では得点するための方法について、音楽ではよりよい響きやリズムをつくり出す方法について省察し、課題や効果的な方法を見だし、理解や表現の質を高めていく子どもの姿が見られた。

○ 実践研究の成果とその分析

本研究取り組み後(H28・H29)、全国学力・学習状況調査において2年連続で国語・算数ともにA・Bすべての問題で全国平均を上回っており、特に活用力を問う問題の正答率が高い。また、「全国学力・学習状況調査報告書」において課題とされている設問の正答率では、平均して国語で19.3ポイント、算数で17.8ポイント全国平均を上回っている。全国平均との差も、向上的変容が見られ、知識の定着、学んだことの活用という両面で向上が見られたことから、「対話」を通して思考を表現する活動を通して一人一人の理解や表現の質が高まってきていると考えられる。

「対話」を通して思考を広げたり深めたりすることができていると答えている割合も平成27年度の84.1%から今年度は95.5%と11.4%上昇しており、ほとんどの子どもが「対話」を通じた思考の効果を実感しているといえる。

必要感がある課題設定、深い学びに結びつけていくための教師の「対話」のコーディネート力、既習内容と関連付けたり、考えを再構成したりすることへの支援といった主体的・対話的で深い学びの視点から自己の授業の改善しようとする教員の意識にも高まりが見られた。

12月に実施した保護者アンケートにおいて「子どもたちの体験を重視したり、自分でよく考えたりするように授業を工夫している」と考えている保護者は94.7%であった。本項目においては昨年度も9割を超えており、対話的な学びを軸とした授業改善の取組に対する理解が得られていると考えられる。

授業づくりの面においては、「対話」の場面に焦点化した学習指導案を作成し、予想される子どもの反応と実際の子どもの姿を比較検討し、修正を繰り返すことで、より子どもたちの学習過程に即した有効な教師の支援を具体化していくことができた。今後、対話的な学びの質を高める授業研究のモデルケースを示すことができた。

また、教材分析や学習指導案検討だけでなく、事前授業や模擬授業をチームで実施することで学習活動そのものについての分析を多面的に進めること、子どもたちの姿をもとにした学習活動分析をていねいに行うことの有効性を明らかにすることができた。

今後の課題は、「見方・考え方」を働かせた教科の本質に迫る学習活動を意図的に設定し、積み重ねることが、資質・能力を高めることにつながっていくという本研究を通して得られた知見をすべての授業に広げていくことである。子どもたちが自覚的にその教科ならではの「見方・考え方」を用い、教科や領域を超えて様々な学習や問題解決に駆使できるように、系統性や連続性を踏まえた指導に取り組んでいきたい。

○ 実践研究成果の活用方策

本実践研究を通して得られた成果を次の形で活用していく。

- (1) 今回の研究で得られた効果的な指導・学習方法に関する知見を校内研修等を通して国語・社会・算数・理科以外の教科等にも広げ、教科等特有の資質・能力を高める授業づくりに反映させていく。
- (2) 公開研究協議会等における提案授業を通して、公立学校教員への研究成果の発信を継続的に行う。
- (3) ホームページや研究紀要等の発行を通して、研究成果を発信し、普及を図る。